

三、 基調講演(2)

政治学の視点から見たイスラームの宗教と国家

小杉 泰

ただいまご紹介いただきました、小杉でございます。

政治学的観点からイスラーム世界について宗教、政治、国家などをめぐって、お話しさせていただきたいと思えます。

今日は、後一カ月ぐらいで一九九四年が終わるという時点ですが、この年は二〇周年として意義深いものがあります。何かといえますと、第一次石油ショックが二十年前にあったわけです。一九七三年一〇月に第四次中東戦争が起こって、その直後からはじまりましたが、翌年の七四年にはトイレットペーパー買い占め騒ぎがあり、節電など、エネルギー節約があり、盛り場は火が消えたように寂しくなりましたし、社会的にもパニックと大変なショックがありました。その石油ショックでいわゆる高度成長が足を止めてしまう。そこからまた、現在に向かって大国化する時代になったわけではありますが、そうして考えると感慨深い二十年です。おそらく今日ここにいらしている方の中には、二十年前のそのころ生まれた方がかなりたくさんいらっしゃるのではないかと思います。私はそれより少し前から中東やイスラームの勉強をしております、石油ショックの二年ぐらい前からアラビア語をやっていました。その当時、アラビア語にはなんの需要もありませんので、面白そうだと、一種の物好きでやっていたと思いますが、その

ころアラビア語を始めたと言いますと、「何になるの？」と聞かれてしまう感じでした。それが石油ショックが起こりましたら「小杉さん、先見の明があったね」。あるわけ無いですよね(笑)。誰も予想がつかなかった。

それで、その石油ショックというのは、簡単にいってしまえば、アラブが、政治的にアラブのことを理解しない国には石油は売らないと言って起こったわけですが、日本は非常に驚いた。その理由は、日本経済は中東に石油輸入の七割を依存しているのですから、それが止められること自体、深刻な問題なのですが、それ以上に、日本は政治と経済は分離が原則ですが、アラブはそうではない、政治は政治、経済は経済という論理になっていないという発見、これに大変驚いたわけです。

さらに今度、第二次石油ショックが、七九年のイラン・イスラーム革命を契機にまた起こりました。第一次石油ショック以降、日本はエネルギーの使い方が非常に賢くなり、技術も革新しましたから、国際競争力がついたという良い面もあったと思いますが、この二番目の石油ショック時には、今度はイランのイスラーム革命ですから、宗教と政治が一体であるという事態で、それも日本の政教分離の常識から見ても、非常に驚くことになりました。二つの石油ショックを通じて、日本では中東についての認識が深まった、あるいは深めなければいけないという気持ちが強くなったと思いますが、その最大のポイントは、政治と経済が分離されない、宗教と政治が分離されない、合わせて言えば、つまり、宗教、政治、経済が相互に結び合った形で展開されていることの発見でした。そういう世界が存在するという驚きですね。しかもそこには世界の石油のかなりの部分があって、大きな影響力がある。そのような中東・イスラーム世界は、なぜそうなっているのか、それを少し論じたいと思います。

現在の国際社会は、冷戦終焉、湾岸戦争以降に位置しています。冷戦が終わって、ソ連が崩壊しました。それから九一年に湾岸戦争が起こりました。クウェートという非常に小さな国を隣のイラクが民族主義、アラブ統一という建て

前のもとに占領したわけですが、それを許しては国際秩序が成り立たないと言うことで、多国籍軍が組織されて、アメリカを中心にイラクを打ち破りました。

しかし、そもそもクウェートという国はいったい何かと考えてみると、ここには総計二億人ぐらいのアラブ人のうちのごく少数——ある辺の小さな産油国の人口は数十万人から三百万ぐらいですが——が、石油に依拠して豊かに暮らしている。今日も国民経済が一つの焦点になっていますが、クウェートに国民経済があるのか、あるいはそもそも「国民」があるのか大きな疑問がある。クウェートは石油が出て立派な国になり、大きなビル、いい道路ができて近代都市が発展しましたが、それを誰が作ったかというパレスチナ人がだいたい作ったわけです。国を失ったパレスチナ人が、出稼ぎという形で、クウェートの建設をしました。クウェートの方は石油が出ますから、いわばのんびりオフィスに座っていればいいということになるわけです。それはわれわれの考え方からすると「国民」が作った国ではない。しかし、それを今度イラクが併合するというのも、国際的常識から非常に外れている。外れているのですが、本人たちの中では理屈が合っているということもある。われわれの常識とはずれています。それは問わずに、既存の国家体制は自明のものとして守るのだということで、湾岸戦争が行われたわけです。そのためには大変な軍事力が必要で、経費もかかった。日本も一三〇億ドルの巨額の拠出をしました。しかし、そういう無理をして、歪んだ現状を維持することでもいいのかどうか、非常に難しいのが現代だと思えます。

冷戦は冷たい戦争ですから、戦争をやらなかったことになっていましたが、実際には地球上のあちこちで熱戦をやっていました。中東では、一九四五年第二次世界大戦が終わって来年で五十年ですが、その五十年間に大きな戦争だけで七つやっています。内戦はもっとたくさんあります。内戦の中にはレバノンの十七年戦争もあります。一九七五年から九一年までの内戦で、おびただしい死者が出ました。ですから、中東は非常に不安定だったわけです。冷戦はアメ

リカとソ連という大きな極が争っても、本人たちは戦争をしないので冷戦という訳ですが、双方が争っている地域では戦争が続いてきた。石油があるために、冷戦期は実は、中東にとっては非常に不安定で戦乱のたえない時代でありました。

それで、中東で本人たちが冷戦期をどのように評価しているかが問題です。冷戦時代の大きな紛争として、アフガニスタン内戦があります。ソ連軍が親ソ政権を支えるために七九年に侵攻して、ソ連にとってのベトナム戦争であったという見方もありますが、内戦になりました。侵攻時には、モスクワ・オリンピックをボイコットしたり、西側諸国は抗議をしましたが、アフガニスタン人たちは「イスラーム闘争」を始めました。いわゆるムジャーヒディーンという人たちです。彼らはゲリラ闘争をやってついにソ連軍を追い出し、九二年には親ソ政権も潰してしまいました。冷戦の終焉は、だいたい自由主義が勝った、西側が勝った、ソ連が負けたということになっていますが、それは東・西で争っていたという認識だからで、イスラーム世界はソ連とアメリカに挟まれてその勢力争いの場になりつつ、本人たちは自分たちのアイデンティティを主張していたわけです。自分たちはイスラームで戦った。だからソ連が滅びた、アフガニスタンで我々がやつけたんだという考えがあるわけですね。自分だけで勝ったとは言いませんが、少なくともイスラーム世界の認識ではアメリカがあり、ソ連があり、イスラーム世界がある。その中で、イスラーム世界はソ連とは戦っていたという。アフガニスタン闘争がどのくらいソ連崩壊に寄与したかは細かく分析しなければなりません。少なくとも、彼らが第三の勢力であるということには根拠があります。ですから、今イスラーム世界では、ソ連が滅びたわけですから残っているのは西洋とイスラームだという認識があります。文明、あるいはものの考え方として二つ残っている。ソ連は崩壊しましたが、ロシアは勢力として残っているわけですから、問題は考え方としての共産主義は負けたということ。言いかえると、人類がどうやって生きて行くのかという考え方について三つ

あったが、一つは負けた、残りは我々イスラームと西洋なんだというわけです。もしかすると、二つしか残っていないといっても巨人と小さな子供が残っているという話かもしれませんが、少なくともそういう強烈な自我意識、自己主張があります。この点は二十一世紀の民族とか国家、国際社会を考える上では、わりあい大事な問題を含んでいるのではないかと思えます。

イスラームの勃興を日本が理解したのは二十年前の石油ショックからですが、次に第二次石油ショックの時、七九年にイランでイスラーム革命が起こります。それから、ソ連がアフガニスタンに侵攻して反ソ闘争、ゲリラ闘争が起こったわけです。だいたいこのイランとアフガニスタンが、今世界中でいろいろ波及しているイスラーム復興主義、——マスコミでは「原理主義」という言い方が多いのですが、原理主義という言葉は何が「原理」なのか全然わからないのでやめた方がいいと、私は主張しています——の震源地です。

私たちの認識として、世界にはいろいろな文化があり、それが多元的に共存して生きて行くのがよいという考え方がありますが、それに対して、冷戦と湾岸戦争が終わって以降、西洋的価値で一元化しようとする考え方が強まっている部分もあると思えます。それで良いのか、疑問があります。やはり、世界の諸文化がどう共存するのか考えなければいけないと思えます。その時に、地域の文化、あるいはその固有性をどう考えるか。イスラーム世界があり、ヒンズー世界があり、アフリカがありという現実をどうとらえるのかですね。西洋近代は普遍性をもっていると思えますが、普遍性は種類しかないのかどうか問題ですし、それから西洋近代の主張は、全体としては「自分たちが正しいからみんな真似れば良い」という傾向が非常に強いのですが、一元化するのではなくて、多様な違いをうまくくむような普遍性はないのか、これが正しいという普遍性ではなく、みんなが共存できる普遍性はないのかが問題になっています。

今、民族紛争がたくさん起こっているのは西洋式の国民国家がうまく機能しなくなっている面があります。民族にもろいろいろな形があるし、民族意識もいろいろな形があります。今はそれを無理やりでも国民国家の枠に入れていきます。民族があると国を作って、その国の中はブラックボックスとして、国を単位に国際社会を作っています。今の数の数が二〇〇に近づいています。民族あるいは民族集団は少なくとも一〇〇〇の単位で存在するわけですね。国民国家方式で、民族がみんな国をもつのではとても入りきれない。もう領土はみんな分割してしまいましたから、後ですである領土を分け合うしかない。分け合うとなると、大概が戦争や紛争になるのが現実だろうと思います。

そこでこの点について中東やイスラーム世界の発想を見てみたいのですが、一番大きいのは宗教の問題だろうと思います。中東の宗教原理では、人間と宗教は不可分と認識されています。二つ大事な概念があります。まず「ウンマ」ですが、アラビア語でウンマというのは世界的な普遍共同体です。例えば、イスラームのウンマは、あらゆるイスラーム諸国の十億人といわれる信徒を全部合わせて一つのウンマであるといえます。ウンマというのはそういう共同体を指す言葉ですから、世界中に広がっているキリスト教徒も一つのウンマを作っているということになります。ユダヤ教のウンマもあるでしょうし、仏教のウンマもある、そういう考え方です。ここでのポイントは、一つは、これが民族を越える点ですね。

今ある、イスラーム諸国会議機構の場合、そこに加入しているのが五二カ国プラス一機構（パレスチナ解放機構）です。しかし、ウンマということでは一つしかないと考えます。これは現実ではなくて、人の頭の中にあるだけかという、そう単純ではありません。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』という非常に面白い本がありますが、これは我々が民族と考えているものは実際には想像の共同体であることを明らかにしています。私たちが日本人だとイメージしている共同体が日本人なわけです。実際には教育とか日の丸のようなシンボルとかを通して想像の

共同体が作られていくのですが、そういうことを語ったおもしろい本です。それを考えると、ウンマというのはまさに想像の共同体だと思います。実際に存在するのは、アフガニスタンとか、サウジアラビアとかエジプトという国ですから、その国民はみんな自国のパスポートを持って動いているにもかかわらず、「私たちはみんなイスラームのウンマに属している」と思っているというんですね。これはもう完全に想像の共同体だと思います。しかし、想像の共同体というのは、想像なのだから実在しないというのではなくて、理念が非常に大きな力を持っている。理念によって、実体を持つのです。彼らがそういう共同体があると信じているから、例えばボスニアでイスラーム教徒が人道的にひどい目に合っている、これはイスラーム全体の問題だから何とかしようという話になります。それを普通の人も政府も言う。ウンマがなければ、ボスニアは結局よその国の話ですから、我々の理解では「人道的援助」のことはあるにしても、基本的には他国の話になる。対岸の火事ですね。ところが、彼らはそう思っていない。理念が頭の中だけでなく、生活に染み渡っていく機能を持っているのです。例えば、イスラーム共同体は十億人いてもみんな「兄弟」だという理念があります。兄弟と言っても、みんな他人なのですが、そういうふうに思っている。たとえば、兄弟は助けなければならぬという理念から、具体的には「客の権利」が法的な権利として登場します。

客の権利というのは何かというと、異国から来たお客さんを三日間泊めなければいけない。客には三日間泊まる権利があるわけですね。どこかイスラーム諸国で道に迷ったとすると、どこかの家をノックして、「私は道に迷った。三日間泊めろ」という権利がある。すると、宗教的な義務ですから、泊めなければいけない。四日目はもうお客じゃないということかも知れませんが、そういう権利があります。理念といっても、実際レベルでは結構リアルなのです。別な例ですが、例えば、トルコの田舎に行きます。バスに乗ったとします。乗客の一人がお弁当を今から食べようと言います。その時何をするかというと、お弁当箱を開いて、周りの人に「一口いかがですか。ごいっしょしませんか」と言

うわけですね。日本ではそういうことはしませんよね。トルコの場合もこれは、礼儀で言っているわけですから、他の人は「どうぞお食下下さい。あなたのお弁当食べていいですよ」と答えるのですが、それは、兄弟たちといろのに、自分だけで食べ物を独占してはいけないという教えがあるから、一応、みなさんの許しを乞うて食べるということなのです。

日本は礼儀がうるさくて、誘われても食べていい時といけない時とありますが、私はアラブに長く住んでいて「いいな」と思ったのは、その判断を間違えてもいい点ですね。不思議な光景ですが、道路を歩いていますと、道路人夫が昼休みで休んでいて、サンドイッチが何か食べている。通りかかると「どうぞ」と誘うんです。これも礼儀で言っているだけです。「ありがとう」と通りすぎればいいのですが、もし間違えて食べたらどうなるか。「あっ、どうも」といっていただいでしまう。構わないんです、客の権利ですから。日本だと、そういうときに判断を間違えると、「作法の分からない奴だ」と大変非難されますが、イスラームの場合理念の方が勝つんです。理念にはそういう力がある。そういう普遍共同体が、だいたい二十世紀初頭ぐらいままで非常に強い力を持っていました。つまり、西洋から輸出された国民国家が植え付けられるまでです。

我々今、二十世紀から二十一世紀は地球時代であると、それから、ヨーロッパ統合というのは壮大な人類の実験であると言っています。国民国家を乗り越える実験ということですが、イスラーム世界の実体からすると、七十年ぐらいい前までは、より広域の共同体の方が当たり前だった。それを分割して国民国家にしたのが今の現実なのです。だから、地球時代の流れから言うと、逆行しているものを今世紀になって植え付けられてしまったということがあるだろうと思います。それが摩擦を起こす。イスラム世界周辺のあちこちで起こっている民族紛争、宗教紛争はその摩擦としての側面がかなりあるだろうと思います。

次に、「ミッラ」ですが、一言で訳せば宗教社会共同体となります。ミッラは宗教なのですが、その宗教とは個々人の内面の話ではなくて、社会的実体を持っています。だから、社会的な共同体です。例えば、中東で結婚をするときには必ず宗教の法によって結婚します。その、結婚の仕方を決めるのが共同体の法です。「私はマロン派キリスト教徒だからこうやって結婚します」、「われわれの共同体では離婚できないんです」とか、「私はイスラーム教徒ですから、こうやって結婚します」し、「離婚は合法です」とか、そういうような話になっています。これは、宗教ですが、同時に社会関係をすべて律しているわけです。人間は社会的動物だと言うことと言えば、中東では宗教は社会性の一部ですから、宗教のない人間はない、つまり、宗教がないのは社会性がないと言うことと同じになりますから、宗教のない人間はあり得ない。

昔よく言われたのは、日本人が中東に行ったとき、「宗教はなにか」と聞かれるから、「ない」というと共産主義者だと思われるから、そう言うてはいけない、仏教でも神道でもいいから何か言いなさいとアドバイスされていました。みんな宗教を持っているといっても、実際の中東の宗教はイスラームとキリスト教です。キリスト教は「東方諸教会」といいますが、いろいろな教会があります。マロン派とかヤコブ派とか、コプト正教会とかいろいろな教会があります。カトリックなどと比べるとマイナーな感じがしますが、本当はこちらが本場です。しかし、ふつうそうは思われていませんね。例えば、アメリカやヨーロッパからクリスチャンが中東にきます。聖地巡礼したりするわけですね。エルサレムに行ったり、ベツレヘムに行ったりする。そうするとあのあたりはイスラーム教徒が多いのですがクリスチャンも一割ぐらいいます。すると、アメリカやヨーロッパから来た人が喜んで、「え、あなたもクリスチャン？良かった。兄弟だな。いつ頃改宗したの？自分で？おとうさん？おじいさん？」と聞くのです。言われた方は傷つきません。二千年前からクリスチャンやっているわけですから。この地で、イエス・キリストが現れて、布教して以来、ず

うっとクリスチャンなのですね。ところが、ヨーロッパ側はキリスト教が中東から始まったことを忘れている。

それは、やはり、西洋の側のゆがんだ自画像に起因しています。自分たちがキリスト教の本場だと思い込んでいるわけですから。本当は、中東の方が非常に根の深い宗教の地であって、歴史も古いし、代々ずうっとやってきている。セム的一神教と言いますが、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは中東のセム的一神教の伝統に属しています。

そのような根の深い宗教文化が、さきほど言いましたように、結婚などにも介在していますので、宗教意識は世代を通じて再生産されていきます。結婚が宗教によって規定されているということは、つまり、人間は生まれたときから宗教のある家に生まれるわけです。結婚は宗教によってルールが決まっています、離婚できる、できないも宗教によります。妻が二人いてもいいとかいけないとか、いろいろなことが宗教ごとに決まっているわけですが、それで結婚した二人の間に人間は生まれてくる。子供が生まれれば名前を付けるわけですが、名前の付け方も宗教文化の中に含まれています。中東の人は、七割方、名前を聞けば宗教が分かります。例えば、アフマドさん。これはクリスチャンでは絶対あり得ない。イスラム教徒ですね。アブドル・フサイン。これにはシーア派に違いない。ジョルジ。これはクリスチャンですが、どの派でしょうか。もちろん、そういうことを嫌う人もいます。特に近代化された人はそういう宗教色を薄めたいと思って、各宗教に共通の名前を付けることもあります。例えば、「美」「力」「寛容」といった性質を表した名前はキリスト教徒も使うし、イスラーム教徒も使います。しかし、それはファースト・ネームの話ですから、それに名字が加わったり、父親の名前が加わったりすれば、五分間話していれば宗教が分かってしまう訳です。日本では、「山田太郎です」、「仏教徒かな?」というようなことは起こりません。名前を通じて宗教意識が再生産されるということは中東の特色です。会って自己紹介すると、お互いの宗教認識がパッとわかるわけですね。人間関係そのものは、クリスチャンだから仲良くするとかしないとか、そういうことではありません。宗教は違っても仲良くしま

すが、人間のカテゴリーを認識するときには宗教が重要であるのがポイントです。実際のつきあいは、個人の問題ですから、クリスチャンだからいい人だとか、イスラーム教徒だから悪いとかではありません。人それぞれです。その点は日本人と変わりませんが、人間のカテゴリー認識が違います。私たちは民族の違いに細かいですよ。外国人に会ったとき、日本人かどうか、インドネシア人かインド人かとかすぐ考えます。インドネシア人だから付き合うとか付き合わないとかありませんが、人間のカテゴリーとしてそういうように認識します。中東の場合は一義的なカテゴリーが宗教で、民族ではないわけです。

ところが、問題は近代化して以降です。つまり、ここ七十年ぐらい国民国家システムが浸透し、近代化もする。欧米型の近代化は世俗化が前提ですので、特に政治の中では政教分離が自明視されています。私たちは政治学を学んでいると世俗化が前提になりますので、中東のように宗教と政治がいっしょになっているのが当たりまえというような状態を分析する時は非常にやりにくいわけです。世俗化の考え方では、三十年くらい前の研究では、世俗化すれば必ずや、宗教は内面の問題になって終わるだろうとみなしていました。つまり、個人的な信仰になってしまえば、宗教に政治的な意味はなくなるはずだ、と。宗教の宗教的意味は消えないまでも、政治的意味はなくなると予測していた。しかし、実際にはそうは行かなかったのです。

世俗化がどれくらい進んだかは計りにくいですが、仮に、昔は一〇〇パーセント宗教意識で考えていたのが、世俗化してだんだん宗教意識が薄まってきたとします。つまり、今や宗教で考えない、民族単位で考えるとか、あるいは民族も宗教もなくて「わたしは機械技師である」、それがアイデンティティとして大事なんだという職業人などが出てきたりします。それが例えば、三割、四割になっているとします。それが七割まで進めば、その社会は世俗化されたのであり、イスラーム文化とか、キリスト教やユダヤ教のミッラの文化とか、そういうものは昔の話でしたね、と

言うことになるわけですが、実際にはそうはならなかったわけです。

一つは宗教文化が生活そのものに根ざして、再生産されて世代を継いでいくようになっていきますから、容易に壊れない。もう一つは、いろいろな社会的矛盾の中で生きている人間としては、助け合って生きなければなりませんから、助け合いの基礎になる紐帯が非常に大事なわけです。近代化すれば宗教が衰えるというよりも、逆に近代化して、合理化して、工業化して社会を生き延びていくために宗教的な紐帯を動員することも起こってきます。本当ならば、世俗化するなら完全に世俗化してしまう、宗教を残すなら完全に残すのであれば、論理が一貫し、社会は安定する。ところが、昔ながらのパターンは崩す、普遍共同体はつぶす、国民国家にしていく、宗教は世俗化するという、そういう方向で半世紀ぐらい必死でやってきて、うまく行かないので、ここ二、三〇年揺り返しています。その結果、どちらにも行けない状態になっています。完全な世俗化はできないし、といって世俗化を全部宗教に戻すには、あまりにも世俗化してしまったのです。

近代化した知識人も増えました。にもかかわらず、そのような知識人ですら、世俗化して、欧米風な国民国家や民主主義で全部進むかというところ、それには反対なのです。最初に申し上げたように、本人たちの自覚からすれば、冷戦時代も米ソの二極あるだけではなかった、自分たちの文化も戦ってきたんだという強烈な自我があるからだろうと思います。近代化した人でも欧米追従はいやだと言います。

次に、国家の問題に移りたいと思いますが、イスラーム国家を歴史的に考えると、イスラーム国家は何となく、イスラーム教徒ばかりの国みたいなイメージがありますが、本当はイスラームの文化的ヘゲモニーだけでいいのです。十四世紀前にイスラーム世界は大征服で大きくなりましたが、その時のイスラーム国家ではイスラーム教徒は非常に少数派でした。被征服地の住民が大半で、しかも宗教的自由を許しますので、彼らは簡単に改宗しないわけですね。

それでもイスラーム国家であったということは、文化的なヘゲモニーが貫徹していればいいということなのです。その時にイスラーム国家は、宗教単位で契約をしていきます。例えばキリスト教共同体と契約する。さきほど言いましたが、あくまで宗教は共同体で、個人ではないわけです。その共同体としての宗教と契約をします。当時の契約の内容は主権を認め、イスラームの文化的ヘゲモニーを認めなさい、それから税金を納めて下さい、そのかわりに、安全を保障して、宗教的自治は保障します、と。ふつう征服されると、労働にかり出されたりしますが、この契約では征服された方に軍役はありません。安全保障をイスラーム共同体が売っている税金払う方は、いわば安全と自治を買っているわけですから、軍役には行かない。そのような相互関係で、国家ができていた。ついでに言えば、近代の入り口、十九世紀の終わりから二十世紀あたりになると、イスラーム世界の中で、キリスト教徒は税金を納めているが、軍役には一切就かなくていいので、ヨーロッパと一生懸命貿易をしてどんどん地位を高めた。他方イスラーム帝国の方は襲い来るヨーロッパの軍事的脅威と戦うので疲弊してしまったと言うような経緯もありました。いずれにしても、国家を編成していく単位はあくまで宗教でありました。そして、そのいずれの宗教も、いわゆるトランスナショナルな性格を持っている。民族とか、国境を越えているということです。

ここで、一つ問題なのは、このような考え方の中では、法律は人と結びついて点です。領土に付属していない。属地主義、属人主義という言葉がありますが、日本は属地主義ですから、日本の国境内に一步でも入ったら、日本の法律に従っていただくということです。中東の法律は、たとえばイスラーム帝国、オスマン帝国の中に住んでいても、クリスチャンはクリスチャンの結婚をするわけです。クリスチャンを律する法律はクリスチャンの共同体に付属していません。オスマン帝国の領土だから、ここの法律に全員従っていただきます、というふうにはなっていないわけですね。法律は人に応じて適用されます。これは近代の領域国家の法律観と非常に違っています。

その違いが一番激しく紛争を呼んだのは、つい五年前の話ですが、サルマン・ラシディール事件という紛争がありました。イギリスの作家が『悪魔の詩』という本を書いた。この人は元々インド出身、イスラームの出身です。しかし、イギリスに帰化して、イギリスで作家活動している。これをイランの亡くなったホメイニーが、この本は大変なイスラーム冒瀆である、死罪に値すると声明を出しました。イスラーム法の感覚では、属人主義ですから、サルマン・ラシディールはイスラームの出ですから、これはイスラーム教徒の問題であり、イスラーム法に従えばこんなことをしてはいけない、という話をしている。イギリス、ヨーロッパ、あるいは国際社会全体の方は、属地主義になっていますから、この人はイギリス市民である、内政干渉してはいけない、という話になります。完全に法律の観念がずれていますね。あれは、文化摩擦としては大変に興味深い事例だったと思いますが、その点は意外に見過ごされてしまって、単なる国際紛争の扱いだっただけなのは残念でした。一方は属地主義で、もう一方では属人主義のうえ宗教が聖俗に分かれないという違いに注目しなくてはなりません。

私たちの感覚では、宗教は普通、内面にあります。外にはない。ところが、現在でもそうですが、中東世界では、イスラームでもキリスト教でも宗教は人間の外側にあるわけです。たとえば、人の名前に宗教性があるのですから、他人から認識されるとき、すでに宗教がある。宗教は世界観であって、社会を覆っている。世界をどう見るか、宇宙をどう考えるかというコスモロジーも含めて、人間の外側に存在しているわけです。そのことが共通に認識されている世界なのです。世俗化は、その宗教を内面に入れてしまうことです。個々人の問題ですという形にする、プライベートな事項に入れるという作業があって、初めて世俗化が成立します。しかし、実際はそうはなっていません。今の中東では、イスラームでも、キリスト教でも、非常に宗教意識が強い。それが、ミッラの状況と言うことなのですが、何世紀もの間、そのような宗教共同体を基礎に国家を作っていました。それは多民族社会なのですが、近代になってそ

れを国民国家に再編成します。ここ一世紀ぐらいの、最終的にそうなったのは二十世紀になってからの話です。

宗教で区切っていた社会を、仮に縦に分かれていますとしますと、今度は民族というノコギリで、横に切ってしまう。それでなにが起こるかという、国民国家では市民は平等という原則になっていますが、あくまで、どこかの国民に入らないといけないわけです。例えば二十世紀に入るまでのイスラーム共同体では、アラブ人もいればイラン人もいる、トルコ人もいればクルド人もいるという形になっていますが、これを今度、横からばっさり切ってしまう。アラブ人はアラブ民族である、トルコ人はトルコ民族である。しかも、国境のある国家を造るわけですから、切っていく際に、例えば、クルド人がこぼれ落ちてしまう。クルド人は、トルコとイラクとイラン、さらにシリアにもおられますが、四つの国に分散して、ひとつにまとまった国は造られませんでした。それで、大変な努力をして独立運動をやっています、そうすると、イラクでは毒ガスで殺されたりするような、すさまじい運命になっている。クルド人の運命はとんでもない変転をしてしまったわけです。つい、七〇年前まではクルド人はオスマン帝国の中では主流のイスラームの一部ですから、能力さえあれば、大官僚とか地方の知事とか、いくらでも出世していました。お金持ちもいますし。それが、民族ごとに輪切りをした際に、国を持った民族はいいですが、国を持たなかった民族は抑圧されたマイノリティーになってしまう。二世代前であれば、クルド人でシリアの巡礼長とか——巡礼を司る長官のことです——、オスマン帝国の何とか大臣になったような人たちが、今や独立運動をすると毒ガスで殺されてしまうという、ようなところに転落している。

言いかえると、宗教から民族へ転換したことは、平等な市民をつくるということでは、必ずしもありません。人間が生きていく上では何らかの社会的な枠組みが必要ですが、昔ながらの枠組みを崩したからといって、自動的に新しい枠組みに入れ替わるものではありません。あるいは、新しい方が悲劇が増えるということも起こります。

さきほど触れたクウェートも、そのような過程の中で、ごく小さな国をつくった。なぜクウェートのような国をつくったかは、割と単純な話です。クウェートはアラビア湾の一番奥にあります。アラビア湾は非常に浅い海です。アラビア半島の北側がアラビア湾（ペルシャ湾）、南側が紅海ですが、紅海は大変に深い海で、魚も非常に豊富です。逆に、アラビア湾は浅い。そのため、インドからアラビア湾に入ってくるとクウェートに着くまで、良港がありません。イギリスは港を確保するためにクウェートを保護国として押さえた。

そのうちに今度は石油が発見されました。そうすると手離せないわけで、国際政治の強制的な力が加わって、無理矢理、国民国家ではないものを国民国家という形に造る結果になりました。クウェート人は六十万くらいですが、隣接地域のクルド人は二千万人います。十分国を持つだけの民族的な力量があると思いますが、彼らは完全なマイノリティーとして抑圧されてしまう。そういう形になっています。

最後に、もう一つイスラームが自己主張してきた、法の問題に触れておきたいと思います。国民国家では国民が主権を持っていることになっています。王政が残っていてもふつうは立憲王政で、主権を有する国民があつて、その主権が憲法制定権力というものを通じて憲法を制定し、自らを治めていく、そういうような理論構成になっています。ところが、イラン革命やその後出ているイスラームの考え方は全然違っています。違う上に、文化の独自性を主張していますから、なかなか理解が難しいのですが、イスラームの考え方は、人間には主権はないわけです。神に主権がある。神が世界を創造したわけですから、世界は神のものである、主権ももちろん世界の創造者にある、ということのわけです。

この点だけを取り上げて、例えばイランでホメイニー体制になると、あれは神権制だと言われます。神政政治ですね。神政政治は歴史上いろいろ出てきますが、だいたい、聖職者が神のお告げである、といって政治をやります。つま

り、神ないし神の代理人を名乗る統治者がそのような正統性に乗って政治を行うものです。ところが、ホメイニーは神が何を言ったとようなことをいっさい言えません。神の言葉とはイスラームの世界ではコーラン、聖典に書かれますが、これは、今、印刷が進んでおりますから五〇円か一〇〇円で売っているわけですね。どこでも買いたいと思えば、だれにでも手に入ります。ホメイニーが、その本を押入にでも隠しておいて、時々みんなに指示をする、などということはありえません。そうすると、神の主権というのは、一種の哲学的、形而上学的な話題ととらえないといけません。ないと思います。

要は、神に主権がある、人間はそれを行使するだけだ、と。ここがポイントで、人間は主権を行使する権利を持つてゐるわけです。ここからが、普通の政治学の対象であって、その前は哲学の議論なのです。そして、その主権を行使する主体はさきほど話題に出てきたウンマということになります。ウンマつまりイスラーム共同体が全体として主権を行使する。ただし、イスラーム法はコーランなどを基にして法学者がいろいろ考えて法規定を見つけるといふ形をしています。そうすると、恣意的になるのではないかという心配もありますが、法学者というのは学者ですから、学者のいろいろなルールがあつて、それに従っています。大学の先生もいろいろな意見を言いますが、学問のルールに従っていますね。それと同じことで、勝手なこととはできません。ホメイニーも。ルールはずれないわけですから、ここで、学者がつくるこういう法律は学説法といいますが、法律の本を読みますと、学説法は、現代にはもうないと書かれていたりします。イスラームは無視されているようで、ちょっと困ります。実際のところ、イスラーム世界では学説が力を持っています。ホメイニーがサルマン・ラシデーは冒瀆だから許されないと見解を発表すると、人々はそれを尊重する。これが学説法というものだと思います。

個々の学説が正しいかどうかは、切磋琢磨です。ホメイニー学説はおかしいと言っているイスラームの学者もたく

さんおられます。ホメイニーが言ったからみんな右にならえではありません。いずれにしても、そういうように学者がいろいろなことを言っていて、それが全体のコンセンサスになると強制力を持つという法体系です。イスラーム共同体はこの法律を実施しなければならぬと言うことですので、それを実施する機関が必要だということになります。その機関が国家ないしは政府です。

このことを国民国家と、大まかな比較をしてみますと、普通は国民国家の考え方では、国民に主権があります。我々はそれを国会選挙などを通じて行使するわけですね。直接民主主義を一億人でやることはできませんので、間接的に代表者を選ぶ。代表者たちの立法機関の中で法律を作ります。政府の行政機関はそれを執行します。主権というものは目には見えませんが、主権者の意思というものがあってそれを執行しているということ。我々が国民としてつくっている国家が、主権の意思を執行する手段として法律があるという形です。これに対して、イスラーム国家の考え方は完全に逆になっています。まず、最初にあるのはイスラーム法です。次に、そのイスラームの法を担う集団として、イスラーム共同体があります。その共同体は、それこそ、十億人が法律を勝手に執行するわけにはいきませんから、国家を必要とする。国家は一番最後の手段のレベルにあると言うわけですね。こういう完全に逆転した考え方になっている。

この点を考えないで、イランは神権政治なんだ、神憑りの政治なんだという議論も見かけます。しかし同時に、ホメイニーは独裁なんだという論評もありました。独裁は近代政治の一つですから、そうすると、ホメイニーは近代だと言っていることになります。普通、神権制は前近代の政治形態なわけですから、どちらか一つにしなくてはならない。イランは前近代だと言いたいのか、近代だと言いたいのか。近代だとする——私は近代だと思いますが——あれは西洋近代とは非常に異なっています。異なっているものとどう対応するかが、現代の課題です。異質だからと

いって否定するのではなくて、それも含めた上でのもっと次元の高い普遍性が今の国際社会に必要なのではないかと
思うわけです。

特に、日本は東と西の間にあって、かなり独創的な方法で発展した国をつくりましたから、日本人は今の国際社会
がどう考えるべきかという点で、貢献すべきだと思います。実は、西洋は少し困りもので、自分では西洋化がなんだ
かわからないのです。

自分が西洋ですから、西洋化はできないわけですね。西洋化とは西洋ではないところが西洋を学ぶことですから。
そのため、アジア、アフリカあるいは発展途上国が一生懸命やってることの難しさというものを、西洋にはなかなか
分かってもらえないわけです。イスラーム世界の試行錯誤も、どうも理解できない。それに対して、日本は西洋でな
い国がそれをやってみたわけですから、一番むずかしい問題が分かるはずなのです。そういう観点から日本人がよく
考えると、多元性や共存の問題ももう少しよく見えてくるのではないかという気がしています。そういう期待を含め
て、私たち日本人として、世界の文化的多元性や共存の課題にどう寄与できるか考えていきたいと思っています。それが、
これから民族と国家が二十一世紀にどうなっていくかということのポイントだろうというふうに思います。

時間も過ぎましたようなので、ここで終わらせていただきます。